

## 若手研究者の会「夏の学校」の総括

第1回目となる日本解剖学会若手研究者の会夏の学校が、名古屋で開催されました。参加者は全国各地から27名が集まり、その半数は助教で、大学院生は1名でした。第1回ということで初対面の方も多かったので、まずは自己紹介していただき、お互いを知ってもらうことから始めました。実質的なキックオフミーティングですので、若手研究者の会をどのような運営方法で、どのような方向性にするのかということについて話し合うことに重点を置きました。

まずは、他の若手の会がどのような活動をしているのかを参考にするため、4名のゲストの先生を招き、パネルディスカッションを実施しました。パネリストの先生方は、生化学若手の会・生理学若手の会・脳科学若手の会、NMR若手の会などの運営に携わって来られた先生方で、どのような活動をしているのかを具体的に教えていただきました。いずれの学会も夏の学校のような企画を行なっており、生理学会以外は大学院生が主体となり動いているようでした。親学会と切り離されている若手会が多く、「お金は出すけど口はださない」という自由なスタンスが、持続的・自発的な活動に繋がっているようでした。一方で解剖学会の特殊性も見えて来て、若手と呼べる大学院生の数がかなり少ないこと、教育がかなりのウェイトを占めていて、教育・実習に関する議論が期待されている点が挙げられます。また、他の若手の会では就職不安がよく話題提起されますが、解剖学業界では人手不足が問題となっており、いわゆる売り手市場になっています。将来的に他の若手の会とジョイントシンポジウムなどを開催すれば、両者の問題解決につながる可能性も考えられます。

次に、実習・教育に関する演題発表が4人の先生方から行われました。死後AIを用いた解剖学についての発表や肉眼解剖実習指導の工夫のあり方、研究と教育の両立について、技術職員の働き方について、発表して頂きました。開催後アンケートによると大変参考になったと、コメントがありました。

2日目は研究発表および会の運営に関するディスカッションを行いました。研究発表は2演題あり、両演題共に大変興味深いものでした。しかしながら、事後アンケートでは、思い切って無くしてしまっても良いという意見と、もっと研究演題が多い方が良いという意見があり、今後の課題となりました。

次に、この若手の会が、今後どのような活動をしていくのがよいのか、話し合われました。はじめに若手の会の規約案について討論した後に、案の承認を行いました。グループディスカッションを行い、各班から様々な意見が出されました。一番多かった意見としては、実習に関する教育講演を聞きたいということでした。大御所の先生に解説をしてもらいたいという希望が多かったです。また、臓器別にミクロからマクロ、そして病理や臨床と繋げた教育的なシンポジウムも開催して欲しいという意見もありました。一方、解剖学業務が大変な労力であるにも関わらず、それが評価されずにプロモーションに繋がっていないという意見もあり、これについても皆でディスカッションを行いました。既に生理学会や薬理学会が行なっているエデュケーター認定制度のような学会公認の制度を設けてもらえれば、教育が客観的に評価してもらえるのではないかと期待されます。

最後に来年の夏の学校の開催について話し合いました。今回同様に夏に開催するという意見と学会前日が良いのではないかという意見に2分されました。今後、交流シンポジウム班において検討するという形で、結論を出すには至りませんでした。

以上、第1回目の夏の学校ということで、手探り状態での開催となりましたが、参加者同士の交流が深められ、若手の会の方向性についても活発な議論ができましたので、当初の目的はある程度達成したと思われます。実際、開催後のアンケートでは、良かった点として、この夏の学校でないと知り合えなかった先生と出会えた、解剖学教育に関して問題意識を共有する人達と直接会う機会が持てた等の声が寄せられています。今回形成された横のつながりが、将来、生きてくるのではないかと期待されます。参加者からは、次回もまた参加したいという意見が大多数でしたので、次回も何らかの形で開催できたらと思っています。